

## 17. マツムシソウ（マツムシソウ科マツムシソウ属）

### *Scabiosa japonica* Mic.

2014年9月

日当たりのよい山野の草地に生育する越年草で、高さ 30～90 cm。根は垂直に地中に伸び、乾燥に対応できるようになっています。葉は毛があり、羽状に分裂し長さ 5～10 cm、裂片は鈍頭で、個体により裂片の幅に違いがあります。花は 8～10 月に分枝した長柄の先に頭花を上向きに 1 個つけます。径 4 cm ほどで、中心部の小花は筒状で等しく 5 裂し、周囲の小花は 5 裂し、外側の裂片は青色で大きく伸び、美しくなります。分布は北海道、本州、四国、九州で、日本固有種です。草原が広がる信州や九州では比較的に見られますが、多くの府県で激減しており、兵庫県でもごく希少な種類で、今までの記録では但馬、丹波、摂津（福岡ほか：兵庫県産維管束植物 7）で、確実に現存しているのは加東市のため池土手や六甲山です。最近、六甲山のゴルフ場に生育が確認されました。ゴルフ場は意外な草原で、特に除草剤を使わないところはカワラナデシコなどの草原生植物の宝庫といっても過言ではないようです。今後は除草剤の使用していない、あるいは極力控えているようなゴルフ場の植生調査は重要となってきました。兵庫県版レッドデータブック 2010 の A ランク、近畿版レッドデータブック 2001 の A ランクに位置するまれな植物です。マツムシソウ属の多くは地中海沿岸に多く、約 70 種類があるといわれ、花の美しいものが多く、セイヨウマツムシソウ (*Scabiosa atropurpurea* L.) が園芸種としてよく栽培されています。また、属名の *Scabiosa* は scabies<sup>かいせん</sup> (疥癬) からきており、疥癬を治す薬効があることから、薬草として利用されます。



マツムシソウ：個体による葉の違い



花の拡大